

〔巻頭言〕

本学紀要の特徴と今後の発展をめざして

学部長 北山 三津子

本学の紀要は、開学初年度から刊行され、毎年1冊ずつ年度末に発刊されてきた。本巻が第6巻となる。当初から看護学および看護学教育の発展・向上に貢献することを目的とし、専任教員が研究成果を発表し共有する場として位置づけられている。

過去5巻に発表された論文の総計は122編であり、1巻に収録された論文は18編から30編であった。内容を分類してみると、教育実践活動の評価や方法の開発に関するものが35%と最も多く、次いで、看護実践現場との共同研究の成果の報告が26%、看護実践研究指導・研修事業を通じて捉えた看護の実態やこの事業の意義や成果に関するものが11%であった。看護実践研究指導・研修事業は、県内看護職が大学の知的資源を活用して自己学習や業務改善ができることを目指して教員が現地に赴いて、地域特性を理解した上で実施しているものである。以下、国際交流委員会で計画され、大学の教育・研究活動の充実のために実施した海外研修の報告6%、入試委員会や教育能力開発（FD）委員会、大学院設置準備推進部会等の委員会の活動成果や各委員会活動で捉えた実態の分析が5%、その他が17%であった。これら発表された論文は、教員の日頃の活動が反映されたものであり、特色ある内容となっている。本学では、教員が毎年度の夏期に次年度の教育・研究活動とそれに伴い必要となる予算計画を立てる。講座ごとに教育（実習を含む）のために必要となる経費や共同研究および看護実践研究指導事業・研修の費用、各種委員会活動のための費用を算定しており、事務局の担当者と協働して資料を作成して予算の獲得に努めている。本紀要は、教員が行なった教育・研究活動の成果を県民や実習施設等に示す主要な手段として機能していると考えられる。今日、教員が研究成果を発表する場は、学会誌等多様であるが、その

なかで、本学紀要が果たす役割は明確であり、今後もより一層の充実を図りたい。

本学科は、既に完成年度を終え、開学後6年目となっている。昨年度から看護学科のカリキュラムの見直しを開始している。過密な授業編成は、看護学の学士課程に共通する課題であり、本学科も同様であるが、授業内容の精選と授業時間の短縮による学生の自主的な学習時間の保障のために、教育課程検討委員会や関連委員会が連携し合い、全教員参加による検討が着実に進んでいる。本学科を卒業する学生の看護実践能力の到達度を社会に対して担保していくために、三年次の領域別実習や看護学の学習の総仕上げと位置づけられる四年次の卒業研究の到達目標を明確にするための取り組みが講座単位で、あるいは委員会単位でなされてきている。今後は、このような教育活動の評価を通じた、卒業時の到達度の明確化や学生の到達度の評価に繋がる教育実践研究の報告が求められる。また、看護実践研究を中核とした大学院修士課程は今年度が完成年度である。さらに、来年度には大学院博士後期課程が設置される時期を迎え、看護学の高等教育機関としてようやく形が整う。博士課程では、看護実践研究指導ができる人材の育成を目指しており、実践研究方法論の確立が急務である。今後は、開学当初から推進してきた看護実践現場の課題をとりあげた共同研究を通じて、実践研究方法論の創出に繋がる研究報告が求められる。

毎年の投稿論文数は相当な数に及び、本年度から年2回の刊行となる。教員は、教育・研究活動に積極的に取り組んでいるので、紀要がそれらの活動の評価・拡充のために活用され、活動成果の公表の場として発展するように活発な投稿を期待したい。